

# 「デジタル・バスター」

—初稿—

2026/1/26

米俵

〈人物表〉

空木 律希

(13)

中学1年生

空木 顕真

(45)

寺の住職・律希の父

九条 戒

(36)

顕真の友人

1. 空木家・本堂（朝）

静寂の中、木魚の音だけが一定のリズムで響く。差し込む朝日で、黄金の仏像が神々しく輝いている。その前に座っている空木顕真（45）、木魚を叩きながらお経を読む。

2. 空木家・本堂廊下（朝）

柱や床板は、数百年の伝統を感じさせるように黒光りしている。厳かな雰囲気破るように、足音を響かせて歩いてくる空木律希（13）。最新のタブレットを片手に、首からはヘッドホンをかけている。

律希 「おーい、親父。また三二一死んでんだけど。仏像が干渉でもしてんの？」

3. 空木家・本堂（朝）

律希、顕真の後ろに横になり、タブレットをいじる。顕真、木魚を叩く手を止めずに、

顕真 「律希、姿勢を正せ」

律希、無視して、

律希 「あー、またタイムアウト。オフラインとか、まじ人権ないわ」

木魚を叩く音が響く中、ヘッドフォンをつけ、

律希 「ノイズキャンセル」

そのまま目を閉じる。すぐに寝息が聞こえ始める。

顕真、眉間に皺をよせる。

× × ×

顕真、律希のヘッドフォンを取り上げ、

顕真 「律希！」

律希、嫌々目を開けて、

律希 「うっせーなー。まだロード中だよ」

再び、目を閉じる。

顕真、少し考えてから、

顕真 「お前がこの前言ってた除霊の件だが――」

律希、飛び起きて、

律希 「えっ、いいの？」

頭真 「除霊にはまず精神と肉体の鍛錬が必要で——」

律希 「また修行の話？ だーかーらー、アナログはもういいって。令和にアプデしないと」

頭真 「積み重ねが大事なんだ。根を張らぬ木に花は咲かない。だから——」

律希 「親父のOS、木造だろ。とりあえず、この前の話はオツケーってことだよね？」

急いで立ち上がって、

律希 「この寺も6Gに対応させるから。俺に任せて」

スキップに近い足取りで、本堂を駆け出していく。

頭真 「あっ、おい。律希！ 掃除は？」

律希 「お掃除ロボット君に頼んどいて」

と、笑顔で手を振る。

頭真、大きな溜息。

#### 4. タワーマンション・室内（昼）

白大理石が敷き詰められた広大なリビング。正面の壁は、巨大な高精細LEDパネルに覆われ、リアルタイムの空が映し出されている。他にも最新機器が揃い、近未来な雰囲気。お掃除ロボットも稼働中。

ドアが開き、律希が入ってくる。

土足のまま立ち尽くし、部屋を見渡す。

そこへ一台のロボットが近付き、名刺を差し出す。

律希、透き通ったアクリル製の名刺を受け取る。

名刺には、KAI Interface CEO / デジタルバスター / Architect 九条 戒 と書いてある。

律希 「（小声で）デジタルバスター……」

奥の部屋から九条戒（36）が現れる。高級そうなスウェットに身を包み、手にはタブレット。

律希 「戒……さん？」

戒、柔らかい笑顔で、

戒 「律希くんだね。D☒ありがとう」

律希 「俺、戒さんのSNS見つけてすぐ——」

戒 「嬉しいよ。そこに座ってもらえる?」

青く照らされたシートが上がってくる。

律希、恐る恐る近付き、腰かける。

その途端、ベルトに体を固定される。

律希 「えっ、あつ、これって……」

戒 「大丈夫。演出みたいなものだよ。そんなに緊張しなくていいからね」

律希、肩の力が抜ける。

戒、タブレットを操作しながら、ゆっくりとした動作で律希に向き合う。

戒 「今日は、除霊修行の短縮が希望ってことでいい?」

律希、前のめりで、

律希 「はい。うちの寺、アナログ過ぎで。一万回お経唱えろとか。まじでサーバーの負荷でしかないんすよ」

戒、少し笑って、

戒 「まあ、非効率ではあるね」

律希 「バグレベルですよ。滝に打たれて精神統一なんて、冷却システムにもなっていないし」

戒、見透かしたように、

戒 「……で? 理由は、それだけかな?」

律希 「えっと……」

律希、照れた表情で、

律希 「好きな子がいて……」

戒 「除霊のプログラムを見せて評価を上げたい?」

律希 「はい。親父の方法じゃ、彼女が別のサーバーに移っちゃいます」

戒 「確かに。青春というセッションは短いからね」

怪しげな笑みを浮かべて、

戒 「望み通り、ショートカットしていいこうか」

律希の周りに大量のモニターが現れ、視界がふさがれる。

ヘッドフォンが強制的に装着され、周りの音が遮断される。

律希、驚いた様子だが、状況を受け入れる。  
ヘッドフォンから、戒の声が聞こえる。

戒の声 「聞こえる？ 君の声も聞こえるから安心して」

律希、繰り返し頷く。

戒の声 「じゃあ、ノイズを削ぎ落した除霊プログラムをインプットするから」

戒、タブレットのフェーダーを上げる。

律希のヘッドフォンからは高周波の電子音が流れる。  
モニターには、綿密なマンダラの幾何学模様が映し出される。それが波形となり、高速で流れる。

律希の瞳孔が揺れる。

律希 「きた。えっ、こんなんで……いいんすか？」

戒 「そうだよ。最適化したからね」

律希 「やば……なんか、体が熱くなってきた気がする」

戒 「脳の深部に届いてるってことだね。律希くん、才能あるよ」

律希、体の力が抜け、座席に深く沈み込む。

律希 「すごい。まじですごい。これ。ダイレクトに刺さる。脳のアプリ。最高に気持ちいい……」

戒、律希の様子を確認して、

戒 「最後に、君のお父さんのログをシンクロさせるから」

律希 「親父？ いらないつすよ」

戒、律希の言葉を無視する。

ドクンと心臓を直接掴まれたような重低音。律希の体が跳ねる。

律希 「ヴ……」

強烈な重低音が続き、椅子が高速回転する。

律希、苦しそうな表情。

戒 「はい、もうすぐ終わるよ」

ゆっくりと音が小さくなり、回転がゆっくり止まる。

律希の拘束がはずれ、体が自由になる。

戒 「お疲れ様。大丈夫だった？」

律希、フラフラしながら立ち上がる。

律希 「最後のだけちょっとキツかったっすけど」

戒 「体、どんな感じ？」

律希 「正直、まだよく分かんないっす」

戒 「じゃあ、試してみようか」

と、部屋の隅を指さす。

黒い物体が動く。

律希 「うわっ。きもっ」

戒 「低級な霊だよ。手をかぎしてみて」

律希 「手？ アナログじゃないっすか」

戒 「やれば分かるよ」

律希、面倒くさそうに手をかぎす。

パンという音とともに物体がはじける。

律希 「は？ えっ」

と、自分の手を確認する。

戒 「おめでとう。ミッション成功だ」

律希 「なんか、ビリっときた」

戒 「ほら、また出てきたよ」

少し大き目の物体が動く。

律希、手をかぎす。

物体消滅。

律希 「は？ デリート余裕かよ」

戒 「これで、最先端の仲間入りだね」

律希、確信するような表情。

その時、不穏な音が響き、壁面のLEDにヒビが入

り、赤黒く染まる。

律希 「えっ、なんすか？」

戒 「おかしいな。招かれざる客かな」

大理石の床からドロリとした粘着質な影が溢れ出す。

律希、急いで手をかぎす。

何の影響もなく、どんどん巨大化していく。

律希、驚いた表情。何度も手をかぎす。

部屋のアラート音が鳴り始める。

律希 「戒さん！」

戒、タブレットを確認しながら、冷静に、

戒 「低級霊のバックにかなり重いのがついてたみたいだ」

巨大化した物体の一部が弾け、律希の首に張り付く。

律希 「うわああ」

首元を拭き取ろうとした律希の手が黒く染まる。

律希 「なんだよ、これ。キモイキモイキモイ」

戒 「あー。感染しちゃったみたいだね」

律希 「戒さん、助けて」

少し困ったような、でも楽し気な顔で、

戒 「仕方ないな。もう一度腰かけて」

律希、転びそうになりながら、椅子に飛び乗る。

戒 「強制的にフルスクリーンを実行しよう」

強固なアームが律希の頭部と四肢の自由を奪う。

律希 「ちよ。これ、きついっす」

戒、優しく微笑みながら、

戒 「今回は暴れると脳の回路が焼き切れるからね。そのぐら  
いは我慢して」

律希、表情が強張る。

戒 「瞬きはしないようにね。網膜経由でニューラル・リンク  
するから」

律希、怯えた様子で、急いで目を見開く。

戒、タブレットを再確認。タブレットには台詞が書  
かれていて、それを読みながら、

戒 「デジタル・エクソシズム、最大出力。デリート開始」

高周波の読経リミックスが爆音で部屋中に流れる。

律希の体が、椅子ごとガタガタと震えだす。

律希 「アガガガガッ。頭が痛い。目が、目がピリピリする」  
椅子からエラー音が鳴る。

戒 「あーダメだ。君のメンタルとフィジカルが弱すぎて、脳  
のポケットが詰まってるな」

律希 「アプデしたんじゃないんすか？」

戒 「んー。このままだと脳みそがオーバーヒートして、物理  
的に廃人かな」

律希の見開いた目は充血。渴いた目から涙が出る。

律希 「詰みじゃん……」

壁のLEDパネルが激しく火花を散らし、アラート

音がどんどん大きくなる。

律希、黒い物体に飲み込まれそうになる。

律希 「わああああ」

戒、思いついた様子で、

戒 「お経だ。君の場合は、効果があるかも。コアを上げろ」

律希、大声で、

律希 「南無阿弥……南無阿弥陀……だあああああ」

律希、白目を向いて、口から黒いものを吐き出す。

同時に巨大化した黒いものも消える。

戒、ロボットが運んできたコーヒーを受け取り、ゆつくりと飲む。

## 5. 空木家・本堂（夕）

夕日で照らされる本堂。

律希、無心で柱を磨きあげている。

## 6. 空木家・木の影（夕）

顕真、戒に封筒を渡す。

戒 「どうも。律希もまだ子どもで安心したわ」

と、封筒の中身を数え始める。

戒 「ってか、あんな重いもの送ってくるなら言っといてよ」

顕真 「律希か？」

戒 「違う違う。感情の重いやつ」

顕真 「何のことだ？」

戒 「え？」

顕真 「ん？」

戒 「まじかよ」

戒、本堂の方を見る。

## 7. 空木家・本堂（夕）

夕日で照らされた仏像が微笑んだように見える。

（おわり）